



イギリス特集

「身体ドラマから舞台芸術創作へ」

7月24日（水）18：00～21：00

レクチャー①「ダンスセラピーについて」

■ 講師自己紹介

○ベアトリス お呼びいただき光栄です。日本に来るのが夢だったので、とてもうれしく思います。私はベアトリス・アレグランティです。ロンドン出身ですが、イタリア人とアイルランド人のハーフです。イギリス人というよりは、もう少しヨーロッパ的アイデンティティがあります。

○松本 私は松本武士です。イギリスに在住している、ダンサーであり、ダンスサイコセラピストです。ベアトリスは、私が2009年に大学院でダンスセラピーを学んだ時の教授で、それ以来、一緒に活動しています。

○ベアトリス ニールも紹介します。彼はイラストレーターであり、私の夫です。そして、わたしの活動のパートナーでもあります。ニールは、今回のワークショップの内容をイラストでビジュアル化して、この会場に貼っていってくれます。

私はプロのコンテンポラリーダンサーであり、振付家であり、映像作家でもあり、ローハンプトン大学でダンスサイコセラピーの研究をしている教授です。つまり、実践者であると同時に、調査研究もし、教えることもしています。5日間しかないのですが、できることは限られていますが、私の様々な活動背景を交差させながら、シェアしていきたいと思います。



■ ダンスセラピーの基本的な概念について

○ベアトリス さて、ダンスセラピーをどう使うかについて今夜は話したいと思います。体をどう使うか？ 体をどう倫理的、かつ創造的に動かすかについてです。1時間ほど話してから、その後に質疑応答をして、休憩に入ります。そして、30分ほど体を使って動くこともします。その後にディスカッションをする予定です。

最初に、ダンスセラピーとは何か、キーになる概念は何か、また、私がダンスセラピーをどう使っているかを紹介したいと思います。まずは、イギリスのダンスセラピー協会が提唱する定義を読み上げます。

(プロジェクター画面を指す。そこには英語で定義が書かれている)

《イギリスのダンスセラピー協会が提唱する定義》

「ダンスムーブメントサイコセラピーは、体と動きを、コミュニケーションと表現の意味を含んだ媒体として表現します。それは人間関係を作っていく過程であり、その中でクライアントとセラピストは、体や動き、ダンスを使いながら、共感的、かつ創造的過程の中で、感情面、認識面、身体面、社会面、精神面の統合を支援します。そして、個人やグループによるセッションを、公的、または民間の、健康、教育、社会的機関で提供しています。ダンスムーブメントサイコセラピーは、研究や実践の分野

で、継続的に拡張させるプロジェクトにより発展しています」

○ベアトリス キーワードは身体、動き、関係性、感情、認識、社会、精神。これらの統合です。しかし、すべてのダンスセラピストが精神面の統合を目指しているわけではなく、それぞれの得意分野があります。例えば私は、「環境」というような、巨大で宇宙的な視野で物事を考えるのが好きなので、「人間以上」というものも含めて考えたいと思っています。

■ ダンスセラピー定義の国による違い

○ベアトリス さて、実はアメリカにも同様の定義があります。ちなみにアメリカでは「ダンスムーブメントセラピー」といい、「サイコ」という単語は入っていません。では、アメリカの定義を読んでみます。

《アメリカの定義》

「ダンスムーブメントセラピーは、健康の改善やウェルビーイングの向上を目的とし、個人の感情的、社会的、認知的、そして身体的統合を促進するために、心理療法的に動きを使うことと定義されています。1940年代に初代のパイオニアたちが（そのほとんどがダンサーでしたが）ダンスや動きにおける心理療法的な効用を見つけました。それは癒しへの総合的アプローチで、精神、身体、そして魂は、繋がっており切り離すことはできないという、経験により確定された概念を基盤にしています。体における変化は、心における変化を反映しており、またその逆もあります。ダンスムーブメントセラピーは、体を通した動きをベースとするアプローチであり、言葉で表すのは難しく、それが何であるかは経験により理解されるものです」

○ベアトリス イギリスのダンスセラピー協会の定義と、とても似ていますね。しかし、どちらも芸術様式としての言及はされていません。この点については後ほど話しましょう。

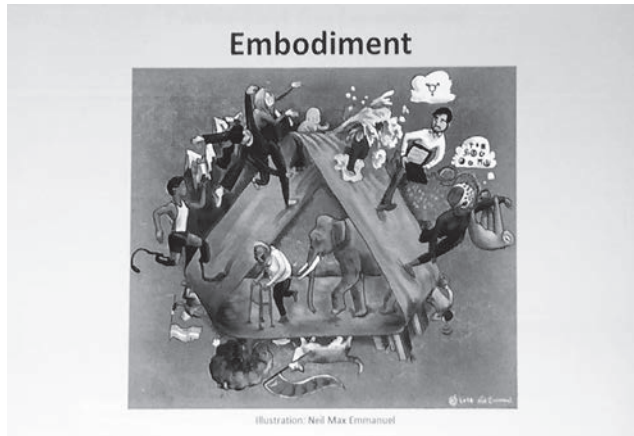
ここで日本のウェブサイトに掲載している定義を紹介します。こちらです。

《日本のウェブサイトに掲載している定義》

「それはダンスや動作で健康を維持/増進/回復し、心身の不調を改善するメソッドです。心身一如の教えに基づき、動きを通して、身体から精神へとアプローチする治療法です。芸術療法の1つで、1940年代に米国で生まれ、発達心理学や精神分析、動作分析法などを取り込み発展しました」

○ベアトリス 以上の3つを比較して、「何が含まれ、何が含まれていないか」という命題で、大きな議論ができそうですね。ここまでは歴史的な文脈です。

■ メビウスの輪をモデルとした概念



○ベアトリス ここからはもう少し複雑な部分の話をしていきましょう。これはニールが描いたメビウスの輪の絵です。メビウスの輪とは、内側と外側がくっついている輪っか。皆さんご存知ですよね？ ここで、「エンボディメント」※¹ について話したいと思います。

※1 この「エンボディメント」(embodiment)を日本語で翻訳するのは難しいが、「体現」「具現」「身体を通す」というような意味合いである。(松本)

○ベアトリス これはダンスセラピストだけではなく、誰にとっても生きる上でとても重要な概念です。「エンボディメント」とはいったい何なのか。私は日々考えています。それは、自分自身の身体との関係であり、他者の身体との関係でもあり、一生かけて考える問題でしょう。「エンボディメントとは何か」という問いに向き合うとき、様々な観点からの理解が大事だと思っています。例えば、哲学的、心理療法的、ダンスシアター、振付、脳科学、フェミニズムなどの観点です。様々な観点から多角的に見ることが、総合的な理解に繋がります。

この「メビウスの輪」は私にとって非常にわかりやすい例です。とてもダイナミックで、生物学的、社会的で、精神的で、環境的であり、まさに多様です。

例えば、エリン・マニングというフェミニスト哲学者が「ボデイイング」という言葉を提唱しています。「ボデイイング」とは、「身体化していく」とか、「何かになっていく」という動きの過程を意味します。人は、自分のライフスパン(≒人生)の中でも色

々なポイント、例えば先ほど言ったような環境だったり、社会だったりがありますが、これらを織り交ぜながら、ある過程を進んでいくものですね。

このメビウスの輪に関する概念は、私にとって基礎的なものなので、今週のワークショップ中に何度か話に出てくることになると思います。

もう1つの重要な点は、「人間と、人間ではないものが一緒になった力」です。ライフスパンの中で、人間としての体、また、環境のような人間以上のものも体として考えることができるかもしれません。しかし、これらも日々変わっていくものです。

■ 心と身体の密接な関係について

○ベアトリス 「絡み合った状態」

(Entanglement) についてもお話ししたいと思います。実のところ、私はあまりいいとは思っていないのですが、西洋的な概念では、心と体を切り離されたものとして考える傾向があります。この概念は、社会や教育、医療



の面でも主流ですが、率直に言って、あまりよくない結果が出ていると思います。フェミニスト物理学者のカレン・バラッドは、「私たちの存在は絡み合っている状態」と言っています。私は日本の色々な書物を読んでいるのですが、これに近い概念を感じる事が多いです。私の同僚であるフィリピン人の文学研究者はこう言っています。グローバルサウス（世界の南側）、つまりアジアのことですが、アジア圏では心と体がつながっているとみなす傾向があり、グローバルノース（世界の北側）、つまり欧米圏では心と体を分離したものとして捉える傾向にある、と。私は、心と体の関係は離れているのではなく、多孔的、つまりたくさんの穴が開いている状態であると考えます。その状態というものが、このメビウスの輪の絵に描かれているように、言語や心理的影響、感覚を通して人と関係すること、エコロジー、環境、テクノロジーが織り交ざった状態です。それは私たちの生き方や、人間の関係性に大きく影響してきます。

人間として平等に存在するために、この概念が重要なのではないかと、私は強調したいです。つまり、「どのように、私たちの体（＝人間）になっていくのか」ということです。私たちの成長とは、論說的（≡機械的）に身体が作られていくということだけに留まりません。そのことを説明する前に、いくつかの言葉を定義しておきます。まずここでの「素材」とは肉体や環境のことを、「論説」は言語や意味の生成を指します。ここからは、「論説」と「素材」の関係性を説明してゆきます。「論説は素材の流れの中で出来上がる」ということについてです。私のケースを例に挙げます。私は自分の活動（ダンスセラピー）をおこなう際、様々な要素を意識します。小さな動き、呼吸のリズム、声のトーンやリズム、その人が使う言語、動きのフレージング、環

境との関係、空間、テクノロジー、モノとの関係。これらが「素材」と「論説」の間を行き来するのです。

■ 間主観性について

○ベアトリス 私たちの体がどう作り上げられていくのか、遡って考えてみましょう。

まず、私たちは1つ以上のものである。そして、私たちは常に関係性の中で出来上がっている。他者との関係、社会や自然環境との関係。私が提案したいのは、これらの構築要素は触感的で、感覚的なものであるということです。

ここで「体を通した間主観性」(Embodied Intersubjectivity)について、お話しします。少し難しいので例を挙げて説明しましょう。例えば、伝統的な心理療法の文脈だと、精神分析は言葉に頼っています。しかし最近、ようやく身体分野にも目を向けるようになりました。かつて精神分析は、言語のほうが体よりも優勢であるというデカルト的な考え(精神と身体分離)が主流でした。そしてそれは、心理療法者にとっては基準の1つになっていました。

私は、ダンスセラピストの立場で他者に影響を与える際に、「素材」と「論説」を同等に扱いたいと思っています。先ほど出てきた「間主観性」とは、何かに関わることのできる能力であり、客観性を持ちつつ何らかの関係性の中にいる能力です。これは成長していく上でほとんどの人が通る過程であり、人間形成において非常に影響が大きいです。発達心理学的に親子の関係がありますが、これが第1の間主観性です。乳児のころは、誰もが世界の中心であり、自分しか認識できないのですが、そこに他者が入ってきて、他者への意識が生まれます。それはつまり、現実が、自分と他者で共有された状況であるという意識を持つことです。イタリアの研究者・ガレーゼは、世界の中心は他者との間にあると提唱しました。脳科学的にはこの過程は非常に重要ですが、親子の間では、感覚的で身体を通した交流が行われます。それは言葉以前の交流で、「あばば」とかの音だったり、動きのマネだったり、非言語交流です。これは常に止まることなく人生において継続され、感覚レベルにおいて、非常に重要です。

■ アフェクト(感覚)について

○ベアトリス ここからは、「アフェクト」※2 について話します。

※2 「Affect」という言葉は日本語には翻訳しにくいですが、「感覚」と言えると思う。(松本)



○ベアトリス 感情というのは社会的に作られるものであります。例えば、何かの感覚（アフェクト）を受けたとき、それに対応する形で悲しみとか怒り、いわゆる感情が生まれる。つまり、アフェクトは言語化される前の感覚であり、それが社会的かつ言語的に表現できる（命名される）ようになると感情になるというわけです。

トラウマや虐待を例に挙げて説明します。「トラウマ」が、何らかの関係性と向き合う能力にダメージを与えることがあります。また、何か事故（アクシデント）に遭うことで、その能力を失ってしまうこともある。そのような人たちとワークをするとき、どのようなアプローチで支援することができるでしょうか。

例えば、脳にフォーカスして考えます。間主観性は、脳のプロセスとして、自分の脳を相手の脳に置き換えます。脳の前頭葉には、動作に携わるミラーニューロンがあります。私がこのペットボトルから水を飲むだけで、見ている人にもそれと似た感覚が共有されるのは、ミラーニューロンの作用です。それは、各自の経験から導き出されるものです。私がバレエや、コンテンポラリーダンスや、カポエラを見るとき、私の脳は動き出します。私自身の人生において、私がそれらを経験しているからです。ですが、ボクシングを見ても、同じようにはなりません。もちろん何かしら感じるものはありますが、それほどではありません。それは、これまでの私の経験とボクシングに、共有できるものがないからです。アフェクトを体で表現するときに、それが相手にどう伝わるかは、分かっていただけだと思います。これは凄いことなのです。

■ 感覚に関するベアトリス氏の経験談

○ベアトリス 私が駆け出しの頃の話です。精神病棟で働いていたころ、「ペルセポネさん（仮名）」をマンツーマンで見てほしいという依頼がありました。彼女は50歳くらいで、拒食症と重いうつ病を患っており、過去に性的虐待を受けていました。ひどい状態で輸血をしていましたが、私は彼女から生きる力も感じました。何故なら、まるで「死んだ体」のようでありながらも、3児の母である彼女は、自分の子どもたちとはいい関係を作りたいと願っていたからです。彼女の中で、生と死がせめぎあっていると私は感じたのです。ある日のこと、セラピーのために彼女に近づくにつれて、私は自身の呼吸が浅くなっていることに気づきました。そこで私は想像しました。「彼女の呼吸はどうなっているのだろうか？」やせ細った彼女は、一体どうやって生きているんだろうと思ったのです。

彼女にはある種、特別な能力があり、そこに私はヒントを見出しました。それは、彼女自身の自我を消してしまうような、まるで彼女がその場にいないような、透明な存在に感じさせるものでした。私は彼女とコンタクトを取るうちに、その彼女の能力は、父

親から受けた性的虐待が生み出したものだと感じました。自分自身の存在を消すことで、自分を保っていたのでしょう。

最初、彼女とのワークでは、アイコンタクトも取れませんでした。そこで、まずは一緒に「呼吸すること」をしてみました。対面して座ることで緊張させるのは避けたかったので、私は床に座り、彼女を見上げました。ここで2人の間に何が起きたか。心理療法的に言えば「逆転移」が起きました。「逆転移」というのは、セラピスト（療法士）がクライアント（依頼人≒患者）に対し、無意識に（あるいはクライアントとの関わり合いの中から）特定の感情を生むことです。人間には様々な経験がありますが、患者の感情が、療法士に作用することで何らかの感情を呼び起こします。つまり、クライアントとセラピストの関係は切り離せない関係であり、メビウスの輪のように、絡み合っているというわけです。だから、彼女とワークを始めた当初、私は自分の体が彼女と比べて、非常に大きく、たくましいものだと感じました。それから私の体が、彼女のために適応していくように感じました。同時に彼女の体も、私の体を通して、自分自身の新しい身体を探していました。こうしたワークを通し、徐々に彼女は、自らの性的虐待の経験を記述できるようになったのです。彼女のほうからワークをはじめ、このような微細な動きのトレースもしたりしながら、ワークを重ねました。

（ベアトリスはゆっくり手を伸ばし、松本氏の指に優しく触れる）

彼女は自らの虐待について記述できるようになり、そして徐々に自らの身体を獲得してゆきました。そして、マンツーマンワークではなく、集団ワークに入れるようになり、そして自らの体験を語るできるようになったのです。私はこの経験で、深い学びを得ることができました。

■ ボディ・ポリティクスの概念について



○ベアトリス さてここで、「ボディ・ポリティクス」という概念について説明したいと思います。ボディ・ポリティクスはフェミニスト的文脈の言語で、フェミニストにとって非常に重要な概念です。間主観的に人と関わる上では、「完全に自由な価値観」というものはありません。我々は皆、特定の概念や偏執を持っているということを知ることが重要です。体の使い方、言語の使い方などは、完全にニュートラルなものではありません。

年齢、国、ジェンダー、性、民族性、体の大きさ、様々な差異が我々に影響します。つまり、身体は社会的な環境に影響を受けるものなのです。ここに力関係や特権なども加わり、ボディ・ポリティクスは様々な要素が入り組んでいる概念だと言えます。

セラピストとして仕事をするときも、芸術家として仕事をするときも、そういう偏った考え方に気づき続けることが重要だと思っています。不平等を生まないこと。ニュートラルな身体というものもあり得ません。パーソナルであるということは、政治的でもあるのです。第二次大戦以降、欧州では右翼の嵐が吹き荒れ、移民や難民が増えています。給料面などの男女不平等もいまだにあります。人種と民族の問題、国によっては性的虐待が犯罪にならない国もあるし、戦時下の国では、子どもや女性が犠牲になっている。避妊が認められない国、同性愛が犯罪になっている国。その国の尺度で価値観は大きく違います。ジュディス・バトラーというフェミニストの哲学者が「身体は固定的なものではない」と言っています。また彼女は「我々は自分自身の身体を持っているのだろうか？」と問いかけます。私の体は私のものですが、実は私のものではないのかもしれない。人間は最も弱い種の1つです。生まれた瞬間から、他者と生きていきます。

我々は皆、社会的、文化的な環境で育っていきます。おそらく成長し、人生の後半でやっと、自分の体を自分のものと理解できるのかもしれないですね。

■ 常に政治的な身体について

○ベアトリス 最後に、「個人的なことは常に政治的である」という概念についても説明したいと思います。公的な私と、プライベートな私。身体は個人的であると同時に公的なものでもあります。身体がニュートラルかどうかは、とても微細なこと。そのことを見落とし、意識しないことがしばしばあります。私は、「私」というものを、どうパフォーマンスしているでしょう。それは、私自身の日々の振る舞いによって構築されています。

個人の振る舞い方は無限にあるはずですが。そのことに対し、ジュディス・バトラーは「ジェンダーにはパフォーマンス性が含まれている」と言っています。これは、ジェンダーには繰り返し行われる行為という要素があるという意味です。ボディ・ポリティクスの概念に基づけば、私たちは文化的に既定されたジェンダー的行為を、日々繰り返し振る舞っていると言える。そのパフォーマンスが反復されることで、それがいつしか当

たり前になり、自然なものに見えてくるというわけです。そのことに對し、問いを投げかけること。つまり、社会的な振る舞いに疑いを持つこと。何がどう反復されているのか。我々は振る舞い、その振る舞いを解体し、そして作り直す。この過程については、後日、「身体が語るパフォーマンス」で説明しようと思います。

たくさんの情報を伝えましたが、大丈夫ですか？ 一旦休憩に入りましょう。

(10分休憩)

■ 質疑応答

○ベアトリス では、何か質問がありますか？

○質問者A 日本人と非常に親和性が高いコンセプトだと思いました。日本人には自分たちが自然の一部という考えがあるからです。

○ベアトリス とても興味深いですね。日本と西洋では、個人と世界との関係に違いがありますよね。日本はすでに絡み合った状態からスタートしたシステムであり、西洋では切り離された状態からスタートしたシステム。イギリスでは教育課程でも「一個人を確立する」ということや、「言語化する」ということが重要視されます。

111

○松本 私の経験でいうと、欧州では「私」を意味するのは「I」という単語のみですが、日本では「私」、「俺」、「自分」など、いくつもの言い方があります。

○質問者A 「私」にするか、「俺」にするか、自分を表現するときにどの言葉を選ぶのか、その段階で既に政治的ですね。

○ベアトリス それは面白いですね！ さて、質問に対してですが、私は全ての答えを持っているわけではありません。全てに答えが出せたら、それはそれで気持ち悪いですね。

○質問者B 私は演劇をしています。なぜ演劇をしているかという「人間は認識すること」をどういうプロセスで獲得したか」を考えているからです。原始から考えると、長い年月をかけて人間は「認識」を学習していると思います。それは言葉という手段を得るよりも前に、身体的な手法で「認識」をしていったのではないかと。だから、このワークショップには非常に興味があります。

○ベアトリス とてもうれしいです。フェミニストの心理学者、ジェシカ・ベンジャミンはこう言っています。「我々は他人を認識したり、他人に自分を認識されたりする能力があるが、その能力が作用しなくなるときは、自分たちがニュートラルであると確信したときである。そこには必ず、ずれが生まれてくるのだ」

○質問者C 私はダンスと演劇をしていたのですが、現在、認知症の方向けの療法プログラムを作っています。認知症の方へどのようにアプローチするか、理論的なことを教えてほしいです。

○ベアトリス なるほど。でも、今日は認知症のことを話す日ではないのです。別の日にお話ししますね。

■ 身体を使ったパート

○ベアトリス それでは、ここからは動いてみましょう。



- ・軽く部屋を歩いてみましょう。
- ・自由に動いてみて。
- ・呼吸をしっかりと。
- ・では、近くの人と3人組になってください。
- ・チームの中で、ABCに分かれてみてください。
- ・では、Aの人たちはこちらへ。

(と、部屋のはじへ集め、他のチームには聞こえないように指示出しをする)

- ・続いて、Bはこちらへ。

(と、同様に他チームに聞こえないように、指示出しをする)

- ・最後にCもこちらへ。

(と、同様に他チームに聞こえないように、指示出しをする)

○ベアトリス：それでは皆さん、これから私の出した課題に従って、3人1組のグループを意識したまま、空間の中を自由に動いてください。自分に与えられた課題を実行しようとする、人に触れたいくなるかもしれません。でも、触れられない人もいます。なので、まずは、チーム内で触れることへの「同意」を取ってください。

(各チーム内で互いに同意を得る)

○ベアトリス いいですか？ では、これから私は言葉で導いていきます。各チームで各自に与えられた課題を達成していきますが、ある段階からはいったん離脱して、自分たちがどのようなことを行っているか、観察できる時間も取りますね。

- ・まず、自分たちの周りに十分な空間があるかを確認してください。
- ・では、Aの人、まずはその空間の中を動いてみてください。空間を見るだけでもいいです。



- ・自分の呼吸がどうかを観察してみてください。
 - ・床との接点を感じて。
 - ・歩きながら、自分のパートナーを見てみて。
 - ・見たときに、どんな感覚が生まれますか？
 - ・続いて、Bの人にも加わりましょう。
- Bの人は与えられた課題を始めてください。

(それぞれの課題を達成するため各自が動き出し、人と空間がシャッフルされていく)

- ・自分の課題をやりながら、自分の体がどうなっているか、どんな形か、質感になっているかを観察してみてください。
- ・Cの人はまだ待っていてください。観察していて。
- ・A、Bの人は動きを強調したり、速度を変えたりしながら、どんなことが起きるか観察して。
- ・自分の体、そして相手の体にどんな変化があるでしょうか。
- ・では、Cの人もA、Bの対話に加わり、自分の課題を達成するべく動いてみてください。

(より空間が活性化し、軽く笑い声なども出てくる)

- ・どんな関係性が生まれていますか？
- ・自分のやりやすいパターンに陥っていませんか？
- ・自分が普段やらないようなアプローチも試して。

(かなり活性化され、笑い声や軽い悲鳴のようなものも聞こえる)

- ・あと2分やります。
- ・この2分で関係性に何が起きますか？
- ・3人組の1人が、少し課題から離れて観察する時間を取ってもいいです。
- ・そして、少し観察したら、また戻って。

- ・ 1人ずつ抜けて、観察する時間を取って。
- ・ だんだんと動きの大きさを小さくしてみて。全身の動きから、徐々に手の動きだけなどになっていくかもしれません。
- ・ そして、徐々に動きが止まっていきます。

(空間の中で全員がそれぞれの形で止まる)

- ・ 今から、各チームにどんなことが起きたかを数秒、再現してもらいます。
他のチームの人は見ていてください。

(と、数チーム、今起きたことを再現していく)

- ・ では、その時に起きた自分の経験を一言で表してみましょう。
「覆われた」「見ないで」「救われた」「振り向いて」
「さみしい」「ちょっとくらいは仲良くしたら?」「触るな」

○ベアトリス 色々な言葉が出てきました。素晴らしいですね。皆さん、各自に何が課題として渡されていたか、気づきましたでしょうか？ 私は3つのチームにそれぞれある言葉を与えましたが、それがどのように解釈され、表現されるかは分かりませんでした。Aに与えたのは「くつつく、繋がる」という課題です。でも、色々なAの動きがありました。Bに与えたのは「切り離す、離す」、Cへは「割り込む」です。これだけですが、様々な感情、動きのやり取り、言葉が生まれましたね。

■ 振り返り

○ベアトリス 残り時間は少ないのですが、感じたことや質問を受け付ける時間にしたいと思います。ニールが今日起きたことをホワイトボードに書いてくれていますので、それを見ながら振り返ることもできますよ。

(エクササイズの間、ニールはホワイトボードに、そこで起きたことを、ビジュアルと言葉で書き留めていた)

○質問者D 初歩的なことです。このダンスセラピーの目的が聞きたい。例えば治療なのか、関係性の改善なのか、芸術的な創作なのか。もう1つの質問は、ダンスセラピーの対象者についてです。先ほどのレクチャーで



は、ほとんどの対象者が精神的な障がいを持っている方だった気がしますが、身体的な障がい者は対象外だという解釈でいいでしょうか？

○ベアトリス 最初の質問に答えます。ダンスセラピーは心理療法の1つで、患者の社会面や、精神面、身体面を統合しながら、患者自身が変化を経験し、それによってもちろん癒しにもつながります。私の経験としては、私自身の芸術的創作が、患者への対処法においても、一定のレイヤー（層）を作ることにつながり、それによって深みを与えることができると考えています。また、心理療法の考え方は、私がどう芸術作品を作るかという基礎的な部分に大きく影響があります。ですが、実際の患者さんと公的に作品を作ることは難しいです。当然患者さんとの間で同意が必要になり、倫理観も問われます。今軽くやったワークですらも、他者と何かをするときには同意を得る過程が重要です。また、今日の例でいえば、生まれた瞬間から私たちは、この「くつつく、切り離す、割り込む」という関係性の中にある。その関係性をどう理解するかを、私自身の芸術的創作を通して探求しています。今日行ったワークは、人間の社会性の基礎にあたる好例です。

ダンスセラピーは、病院やそこに通院している人に向けて、また刑務所で行われる場合もあります。精神的な問題を抱える人だけでなく、身体障がい者に向けてもやります。ダンスセラピーは、誰もが受けられるべきもののなのです。では、何故セラピーは一般的なものにならないのでしょうか。例えば、アメリカのトランプ大統領が受けたら、また違った効果が期待できるかもしれません。ダンスセラピーはハイブリットな（複数のものが組み合わさった）ものです。心理療法でもあり、芸術でもあるのです。

○質問者E ダンスセラピーでは音楽を使いますか？

○ベアトリス 時と場合によります。例えば注意力散漫な集団の場合は、あえて音楽を2つ用意し、彼らに選んでもらいます。彼ら自身に選択肢を与えるのです。そのように音楽を使うこともあります。

○質問者E どうやって患者との距離を縮めるのでしょうか？

○ベアトリス 何ヶ月も時間をかけます。そして、相手に特別な集中を向けます。そこでの居方（存在の仕方）がとても大事です。何故なら、体の微細な動きにまで患者の抱えている問題が現れるからです。例えば、幼少期に虐待を受けた患者の場合、親からの注意を喚起されていないため、他者に注意を向けてくれないケースが多い。そういう相手には、（セラピストである）自分の体がここにあるということを伝える。そのためには、セラピストの存在が重要です。※3

※3 ここでベアトリスは、セラピストが、セラピーをする空間・時間にしっかりと存在することが重要だと強調している。英語ではpresence（プレゼンス）という言葉を使うが、「心身が統一された澄み切った感覚でいる」という事だと思われる。（松本）

○質問者F 先天的な障がいのある患者と、後天的に障がいをもった患者に対して、アプローチは違うのでしょうか。

○ベアトリス 先天的か、後天的かは関係ありません。大事なのは相手の動きに対応していくこと。また相手が何を求めているかに集中し、その瞬間ごとに動きで対応することです。

○質問者G ならば、あまりその人のバックグラウンドは聞かないのでしょうか？

○ベアトリス そういうケースもあります。なので、セッションの場合は即興的であるという心得が必要です。通常、その患者の過去の症例はカルテで提出されるのが伝統的なやり方です。しかし、私が生徒に教えるときは、診断名や病名を信用するなど言います。そういう病名は、精神分析の分野で命名されたもので、実は「科学的な論証のものではない」ケースが多いのです。というのも、診断時にかなりバイアスがかかっていて、例えば、女性や子どもなどの弱者、さらには人種差別などの背景があって生まれているケースがあるのです。

○質問者H アメリカ、イギリス、日本のダンスセラピーの定義が違うのは何故でしょうか？

○ベアトリス 私目から見ると3つの定義は似ていると思います。ただし、ある分野を医療のシステムの中で確立しようとすれば、当然「芸術」への価値比重が軽くなります。しかし、ダンスセラピーはそもそも「芸術」と「医療」の混成です。それを医療分野において効果を証明するためには、「治療」という要素を大きくフォーカスする必要があります。しかし、「芸術」としての文脈を持つことを私は提唱したいです。

さて、今日はここまでにしましょう。ありがとうございました。